

Learn About Industries

この業界を知りたい!

この **業界** を知りたい!

情報技術に関する業界を指して、IT業界と呼ぶことが多い。しかしその示すところは非常に幅広く、多岐にわたる企業によって構成されているのが実状だ。その中で今回は、電子部品や電子機器、コンピュータ等のメーカーによる業界団体であるJEITA（電子情報技術産業協会）で各種の委員を務める河内浩明さんにお話を伺った。

知識情報社会の血液として

JEITA（電子情報技術産業協会）は、2000年に、その前身であるEIAJ（日本電子機械工業会）とJEIDA（日本電子工業振興協会）という二つの団体が合併して誕生した団体だ。前身の2団体は、それぞれ民生用、産業用の製品を主な対象としてきたが、近年急速に両者の垣根が下がり、また共に高度化が進む中で合併に至った経緯がある。日進月歩の情報化を「モノ寄り」の立ち位置から支えてきた業界だと言えるだろう。

「とは言え、会員各社の事業内容も、時代と共に大きく変わってきました。以前はコンピュータを製造販売していた会社が、ソフトウェアやITソリューションサービス（ITによる課題解決ビジネス）へ軸足を移した会社もあります。しかし、そもそも今日では、ハードとソフトの両者が、渾然一体となりつつある、とも言えるのではないのでしょうか」

そう話してくれたのは、JEITAの情報政策委員会に所属し、JEITA講座運営ワーキンググループの主査を務める河内浩明さん。ハードウェアは、それに組み込まれるソフトウェアを欠くことができず、一方のソフトウェアも、ターゲットとするハードウェアを念頭に置いた最適化が重要とされるなど、両者の関係は今日密接不可分なものになっている。

「ハードが好きだから」とメーカーを志望して、首尾良く入社できたとしても、業務はソフトの開発という可能性もあるでしょうし、その逆もあるでしょう。もっとも、これは私たちの業界だけでなく、どんな仕事でも同じだと

思いますけれども」と河内さん。

ではこの業界や、そこで働くということ、どう捉えたらよいのだろうか。

「現代は“知識情報社会”と言われるのが、急速に変化する社会とその課題に立ち向かうために、莫大な量の情報や知識の活用（獲得・蓄積・解析）が必要です。それを基盤として支えているのが情報技術です。目に見えるか見えないかを問わず、世の中のさまざまなものが、その背後で働く情報技術の恩恵を受けているのです。もしもそこで不具合が生じれば、電話やメールが使えなくなるだけでなく交通や経済など、社会のほぼすべての活動に影響が出ることになります。現代社会では、モノの流れもお金の流れも、何もかもが情報技術によって支えられています。かつてはお金が“社会の血液”と言われていましたが、今日ではその流れさえも情報技術で制御されている。すなわち、情報技術こそが現代社会の血液と言えます。そのように、社会全体を支える仕事なんだと考えてもらいたいですね」

「理工系離れ」への危機感

社会にとってそれほど重要な情報技術だが、あまりにも高度化し、同時にまるで空気のように当たり前の存在になったことから、別の問題が生じているという。

「私たちが懸念しているのが、いわゆる“理工系離れ”です。IT技術が当たり前のものになった半面、逆にブラックボックス化し縁遠いものになってしまっているのではないのでしょうか。技術やサービスの利用者として

はそれで十分でしょうが、技術を生み出したり、進化させたりという私たちの仕事を考えれば、この分野への関心が薄れていくことは大きな危機なのです」

そうした危機感から2002年にスタートしたのがJEITA講座だ。これはJEITAの加盟各社から、各分野の一線で活躍する技術者や研究者が講師として各大学に出向き、現場での実体験を中心とした講義を実施。それを通じて、電子情報技術産業の将来を担う人材育成への貢献を目指している。

「JEITA講座は、いわゆる通常の寄付講座とは違って、特定の技術そのものより『技術の面白さ』を伝えることに重きを置いてきました。大学で何を学んだらよいかという気づきを与えたり、私たちの業界で働くことの楽しさや意義を理解してもらったりすることが狙いだからです。ですが最近では大学側の要望もあり、より実践的な内容の講座など、カリキュラムも多様なものになってきました。それも産学連携の人材育成に対するニーズや関心の高まりによるものだと思っています」と河内さん。JEITA講座は今日、高校や中学での「出前授業」へと広がり、多くの若者たちに電子・情報技術への関心のタネをまき続けている。

「現在は東京や関西、中部、東北を中心に9つの大学でJEITA講座が開催されていますが、この他にJEITAの地域支部で行われているものもあり、いずれも好評です。また、学生や先生方からの評価もさることながら、JEITA会員企業の講師側からも、学生との交流が大変よい刺激になっているという声も挙がっています」

“デジタルネイティブ”だからこそ

理工系離れが言われる一方、物心ついた時から情報機器に囲まれて育ち、それを当たり前の存在として使いこなす世代が、社会に羽ばたきつつある。いわゆる“デジタルネイティブ”だ。河内さんは、これからの社会を担う新しい世代に向け、こう語る。

「私たちの世代が思いもよらない使いこなしかたや、新しい用途を生み出していきのは、きっとそうした新しい世代の人たちでしょう。だからこそ、これからの新しい時代に答えられる電子・情報技術を生み出していくのも、



JEITA 会員企業の社員が大学で講義を行う『JEITA 講座』では、企業の第一線で活躍する技術者・研究者の熱意が、直接学生たちに届けられている。写真は中央大学大学院理工学研究所で沖電気工業からの講師が大学院生を対象に行った JEITA 講座の様子。（協力：中央大学大学院理工学研究所情報工学専攻）

またそうした世代だと気概を持ってほしいと思います」

ちなみにグローバル化が叫ばれるのは他業界と同様だが、例えば英語に対する意識には「技術」が絡んで特有の面があると言う。

「ビジネス英会話的なものが必要とされる場面もありますが、海外からの新しい技術情報の吸収や、国際的な学会や会議での情報発信において英語が必要とされることも多いですね。ただ、それは“知りたいこと”や“伝えるべきこと”があつての英語ですから、自分の興味関心や業務に関連づけて考えることができれば、心持ちが変わってくると思いますよ」

目的ではなく手段としての英語、それが明確に意識されているのも、技術が尊ばれるこの業界の特色と言えそうだ。

「世界から“クールジャパン”と言われるほど、技術を楽しみながら豊かなコンテンツを生み出すことに長けている私たち日本人。ものづくりが最後の砦というような悲壮感ではなく、自分たちのこれからを自分たちで創っていくんだと楽しむ気持ちで、私たちの仲間に加わってほしいですね」

一般社団法人 電子情報技術産業協会
http://www.jeita.or.jp/

世界基準のビジネス英語能力テスト

BULATS

The Business Language Testing Service

世界約47カ国1,172団体、
日本でもすでに350以上の企業・団体が採用

詳細は www.eiken.or.jp/bulats

お問い合わせ tel 03-3266-6366

mail stepbulats@eiken.or.jp

世界と繋がるために

Are you sure your message is getting through?

BULATS

Fast, reliable,
and global